

新型コロナウイルス感染症の影響で、聞法が大きく失われてしまいました。このような時にすこしでも皆様に仏法に触れていただけるよう、紙面1枚程度の短い法話を連載いたします。

小松教務所

コロナ禍で人と人との出会いが制限される中で、それでも法の灯を絶やさぬために始まった「法話お手紙」も、今号で最終回となります。最後は教区駐在教導 西山が寄稿させていただくこととなりました。御笑覧ください。

### また今日だと思ってた

僕が小松教区に赴任して早2年が経った。当時小学2年生になったばかりだった長男は小学4年生になり、新しい小学校にもすっかり慣れて一安心。1歳だった次男はもうすぐ4歳、大谷幼稚園に元気に通っている。

昨年からトイレトレーニングしていた次男は、とうとううちもトイレでできるようになった。まだおしりはうまく拭けないけれど、達成感があるのか、うんちのたびに「できました！」と元気に報告してくれる。



そんな次男の様子から、長男が3歳のころに頑張ってトイレトレーニングしていたころを懐かしく思い出しながら、長男に「君はもうちゃんとトイレに行けるしおしりも拭けるし偉いねえ。」と褒めたところ、「そんなの当たり前すぎる。」との反応だった。そうか。

さて、そんな長男くんですが、3歳の頃、もう6年も前のことになるけれど、とても印象深い話しをしてくれたことがあった。

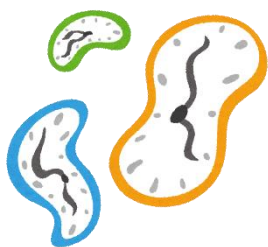
ある日の夕食のとき、彼はふいにこんなことを言い出した。「お父さん。明日ってあるじゃない？」と。何のことだろうと思いつつ「うん、あるね。」と答え「何のこと？」と聞いた。すると彼は「昨日寝て、起きたら今日でしょ。それで、今日寝たら、明日になるでしょ。」と言う。そりゃそうだ。やっぱり何のことだろうと思いつつ「うん。」と返事をすると、最後に彼はこう言った。



「僕ね、少し前まで、今日寝て起きても、また同じ今日なんだと思ってた。」

ああ、と僕は思った。感嘆の気持ちだった。思わず「ありがとう。」と答えたら、彼はきょとんとしていたっけ。

「過去未来現在」という時間の感覚は真実ではなく、人間が都合によって作り上げた観念の一つであるらしい。本当は、運動による変化の連続であるだけなのに、人間が勝手に一定の法則を見出して、そのものの過去～未来という時間のつながりを作り出しているに過ぎないと。



かつて、人間という生物として未成熟であった僕たちは、この時間という捕らわれの中を生きていなかった。「今、このようであること」の繰り返しで、その前後につながりを見出したりしなかったのだから、例えば過去を後悔したり未来を不安に思ったりしなかった。

目が覚めたら、また今日を生きることができていたのだ。昨夜来ないで欲しいと思っていた明日でも、早く来て欲しかった明日でもなく、また同じ今日を生きられていたのだ。

あの日、3歳だった長男は、「ただ今」という自由を失い、時間という捕らわれを生きる者となった告白をしてくれた。

人間になってしまった長男に、仲間になった頼もしさや寂しさ、そしてもう戻れない安心の日々を思った。

言葉にはなりようのない思いだったけれど、総じて「ありがとう。」と伝えたくったのです。そんなことがあったのでした。

僕は最近、自分の一生を超えた大きないのちを生きていることを意識したい、と願うようになりました。自分の一生という狭い範疇を超えた価値観を生きたいと申しますか。帰命や南無というところを、そんな風に思うようになりました。

例えばそれは「今、私が死んでも大丈夫」ということです。そして、この「大丈夫」とは「いのちは繰り返しつながっているから大丈夫」ということではなくて「今、こうであることで充分だから」です。

たとえ頂けなくとも、この身に受けて。南無阿弥陀仏。

